

② 入試区分

人間生活学研究科博士前期課程（Ⅲ期）

③ 出題科目

専門科目

④ 出題の意図

依存症について、次の3点を問うことを意図して出題した。①依存症を「自制心の欠如」「人格の問題」といった道徳的理解ではなく、報酬系の強化学習、感情調整の困難、負の強化などの心理学・精神医学的モデルから説明できているか、②依存行動を単なる快楽追求としてではなく、不安の軽減・孤独の緩和・トラウマ回避などの心理的機能を持つといった視点で考えられているか、③支援について、「管理・統制」の視点ではなく、「機能の代替と回復プロセス」の視点から論じているか。

受験番号	氏 名

2026 年度Ⅲ期 人間生活学研究科心理学専攻（臨床心理学コース）博士前期課程
入 学 試 験 問 題 （ 専 門 科 目 ）

（4 枚中 1 枚目）

※問題は 2 問あります。2 問とも解答してください。（解答用紙を含め、全部で 4 枚あります。）

問題 1. 次の文章の①～⑮の空欄に適切な語句または人名を、2 枚目の語句選択用リストから選んで解答してください。ただし、一度選択した語句は他の空欄には使えません。

- （1）脳幹において、呼吸、心拍、嚥下など生存に欠かせない部分の中枢となっているのが、
（①）である。
- （2）人が過去の記憶を振り返る際に、特に 10 代から 20 代（青年期・若年成人期）の出来事を他の時期よりも多く、鮮明に思い出す現象で、「記憶のコブ（隆起）」のように見えることから名付けられた心理現象を
（②）という。
- （3）「自分自身への思いやり」を意味し、失敗や困難な状況に直面したときでも自分を批判せず、親しい友人に接するように優しく理解し、受け入れる心の状態や態度は、（③）と呼ばれている。
- （4）教育社会学者の森田洋司は、「いじめ集団の四層構造論」として、加害者と被害者の他にも、見て見ぬふりをして暗黙裡にいじめを支持する（④）という役割があるとした。
- （5）少年非行の発達の理解では、幼少期から青年期にかけて反社会的行動が持続するタイプと、思春期に一時的に現れるタイプを区別する理論がある。この二類型モデルを提唱したのは（⑤）であり、それぞれを「ライフコース持続型」と「思春期限定型」と呼んだ。
- （6）子どもの行動変容を目的として、親がほめ方や指示などの具体的な養育スキルを獲得することを目指すものを（⑥）という。
- （7）認知心理学における問題解決では、確実に正解が得られる（問題解決に至る）系統的な手順のことを（⑦）という。
- （8）標準正規分布表において、Z（ゼット）の値が 0（ゼロ）のときの上側確率は（⑧）となり、Z が 1 のときの上側確率が 0.16 であるとする、そのときの下側確率は（⑨）となる。
- （9）ひきこもりの支援、依存症者への支援において用いられるコミュニティ強化アプローチと家族療法を組み合わせた支援方法の略称を（⑩）という。

受験番号	氏 名

(4 枚中 2 枚目)

- (10) 子どもが生涯にわたる人格形成の基礎を築き、心身の状況や環境に関わらず、その権利を擁護し、幸福な生活を送ることができる社会を目指すことを目的として、国や地方公共団体の従うべき基本理念を定められた法律は (11) である。
- (11) 実験参加者がすべての実験条件に参加する実験計画を (12) という。
- (12) 2 者関係において相手から何らかの報酬を与えられると同様の報酬を返そうと動機づけられるが、それがかなわない場合に感じるとされる心理状態を (13) という。
- (13) まんが風の刺激図を利用し、欲求不満状況に対する反応の仕方等を把握する投映法は、 (14) である。
- (14) DSM や ICD の診断基準に見られる精神疾患であり、金銭目的や個人的な必要性からではなく、「盗む」という行為そのものから得られる緊張感や解放感に依存して万引きなどの窃盗行為を繰り返してしまう精神疾患を (15) という。また、この疾患は摂食障害との関連が示唆されている。

【語句選択用リスト】

パイロ・マニア	セルフ・コンパッション	児童虐待防止法	0.5	アルゴリズム	心理的義務			
0.84	洞察	SFA	類推	バンデューラ	仲裁者	生涯記憶想起量	SMARPP	P-F スタディ
エゴ・レジリエンス	レミニセンス・バンプ	応用行動分析	延髄	事前事後計画	こども基本法			
クレプト・マニア	1.0	CRAFT	実験参加者間計画	0.34	ロンブローゾ	観衆	心理的報復	
チャイルド・トレーニング	TAT	児童福祉法	モフィット	傍観者	グリット	ライフスクリプト		
ヒューリスティック	ロールシャッハテスト	心理的脅迫	中脳	ペアレント・トレーニング				
実験参加者内計画	橋	混合計画	心理的負担	パラフィリア				

受験番号	氏 名

2026 年度Ⅲ期 人間生活学研究科心理学専攻（臨床心理学コース）博士前期課程
入 学 試 験 問 題 （ 専 門 科 目 ）

（4 枚中 1 枚目）

※問題は 2 問あります。2 問とも解答してください。（解答用紙を含め、全部で 4 枚あります。）

問題 1. 次の文章の①～⑮の空欄に適切な語句または人名を、2 枚目の語句選択用リストから選んで解答してください。ただし、一度選択した語句は他の空欄には使えません。

- （1）脳幹において、呼吸、心拍、嚥下など生存に欠かせない部分の中枢となっているのが、
（① 延髄 ）である。
- （2）人が過去の記憶を振り返る際に、特に 10 代から 20 代（青年期・若年成人期）の出来事を他の時期よりも多く、鮮明に思い出す現象で、「記憶のコブ（隆起）」のように見えることから名付けられた心理現象を
（② レミニセンス・バンブ ）という。
- （3）「自分自身への思いやり」を意味し、失敗や困難な状況に直面したときでも自分を批判せず、親しい友人に接するように優しく理解し、受け入れる心の状態や態度は、（③ セルフ・コンパッション ）と呼ばれている。
- （4）教育社会学者の森田洋司は、「いじめ集団の四層構造論」として、加害者と被害者の他にも、見て見ぬふりをして暗黙裡にいじめを支持する（④ 傍観者 ）という役割があるとした。
- （5）少年非行の発達の理解では、幼少期から青年期にかけて反社会的行動が持続するタイプと、思春期に一時的に現れるタイプを区別する理論がある。この二類型モデルを提唱したのは（⑤ モフィット ）であり、それぞれを「ライフコース持続型」と「思春期限定型」と呼んだ。
- （6）子どもの行動変容を目的として、親がほめ方や指示などの具体的な養育スキルを獲得することを目指すものを（⑥ ペアレント・トレーニング ）という。
- （7）認知心理学における問題解決では、確実に正解が得られる（問題解決に至る）系統的な手順のことを（⑦ アルゴリズム ）という。
- （8）標準正規分布表において、Z（ゼット）の値が 0（ゼロ）のときの上側確率は（⑧ 0.5 ）となり、Z が 1 のときの上側確率が 0.16 であるとする、そのときの下側確率は（⑨ 0.34 ）となる。
- （9）ひきこもりの支援、依存症者への支援において用いられるコミュニティ強化アプローチと家族療法を組み合わせた支援方法の略称を（⑩ CRAFT ）という。

受験番号	氏 名

(4 枚中 2 枚目)

- (10) 子どもが生涯にわたる人格形成の基礎を築き、心身の状況や環境に関わらず、その権利を擁護し、幸福な生活を送ることができる社会を目指すことを目的として、国や地方公共団体の従うべき基本理念を定められた法律は (11) **こども基本法**) である。
- (11) 実験参加者がすべての実験条件に参加する実験計画を (12) **実験参加者内計画**) という。
- (12) 2 者関係において相手から何らかの報酬を与えられると同様の報酬を返そうと動機づけられるが、それがかなわない場合に感じるとされる心理状態を (13) **心理的負担**) という。
- (13) まんが風の刺激図を利用し、欲求不満状況に対する反応の仕方等を把握する投射法は、 (14) **P-F スタディ**) である。
- (14) DSM や ICD の診断基準に見られる精神疾患であり、金銭目的や個人的な必要性からではなく、「盗む」という行為そのものから得られる緊張感や解放感に依存して万引きなどの窃盗行為を繰り返してしまう精神疾患を (15) **クレプト・マニア**) という。また、この疾患は摂食障害との関連が示唆されている。

【語句選択用リスト】

パイロ・マニア セルフ・コンパッション 児童虐待防止法 0.5 アルゴリズム 心理的義務
0.84 洞察 SFA 類推 バンデューラ 仲裁者 生涯記憶想起量 SMARPP P-F スタディ
エゴ・レジリエンス レミニセンス・バンプ 応用行動分析 延髄 事前事後計画 こども基本法
クレプト・マニア 1.0 CRAFT 実験参加者間計画 0.34 ロンブローゾ 観衆 心理的報復
チャイルド・トレーニング TAT 児童福祉法 モフィット 傍観者 グリット ライフスクリプト
ヒューリスティック ロールシャッハテスト 心理的脅迫 中脳 ペアレント・トレーニング
実験参加者内計画 橋 混合計画 心理的負担 パラフィリア

記述問題

アディクション（嗜癖・依存症）を、単なる意志の弱さではなく心理学的問題としてどのように理解すべきか。具体例を挙げて臨床的支援の考え方を論じなさい。

解答のポイント

アディクション（依存症）は、従来、「自制心の欠如」や「意志の弱さ」といった道徳的な問題として捉えられてきた側面が大きいが、現代の臨床心理学では、感情調整と報酬学習の障害を中核とする心理的問題として理解されている。アルコール依存や薬物使用障害だけでなく、ギャンブル障害やゲーム障害といった行動嗜癖も、共通して「不快な感情からの逃避」と「即時的な報酬による強化」という同一の心理学的メカニズムを持っている。

多くの依存症者は、不安、抑うつ、孤立感、トラウマ体験などに慢性的にさらされており、物質や行為は一時的にそれらを和らげる自己治癒として機能する。この点でアディクションは、単なる快楽追求ではなく「耐え難い感情を調整するための手段」として理解される。例えばアルコールは不安を鈍麻させ、ギャンブルやゲームは没入によって現実の苦痛を忘れさせるものとして機能している。

しかし、こうした対処は短期的には効果があるものの、長期的には脳の報酬系の過敏化や生活上の破綻を招き、さらに強い苦痛と使用の悪循環を生む。この悪循環の中で、本人は「やめたいがやめられない」という葛藤状態に置かれることになる。

したがって臨床的支援は、単に使用を止めさせることではなく、嗜癖が担っていた心理的機能を理解し、それに代わる感情調整や対人関係の手段を育てることを目標とする。動機づけ面接によって変化への両価性を扱い、認知行動療法やトラウマ志向アプローチによってトリガーや感情への対処力を高めることが重要である。また支援者は、失敗や再使用を「意志の問題」ではなく回復過程の一部として捉える姿勢をもつ必要がある。

このようにアディクションは、苦痛に満ちた生の中で形成された適応様式であり、理解と関係性に基づく支援が回復の基盤となる。